

| | | |
|---------|--|--|
| 支援センター名 | 飯島町体験活動ボランティア活動支援センター | |
| 所在地 | 〒399-3702 長野県上伊那郡飯島町飯島 2551 番地 | |
| 連絡先 | Tel 0265-86-5511 Fax 0265-86-5657 ホームページ http://www.town.iijima.nagano.jp | |

事業の概要とポイント

- ・犯罪の低年齢化や人間関係の希薄化が大きな社会問題となっている。また、学習塾や各種の稽古事など学校外学習活動が増えたり、室内で遊ぶテレビゲーム機が普及したりして近隣の子ども同士が群れて遊ぶ姿が見られない。そこで年齢の違う子どもたちが体験をとおして仲間と共存していくことを学んでほしかった。
- ・平成14年4月より完全学校5日制が施行されたことに伴い、社会福祉協議会でも受け皿づくりの一端を担うことを考えた。
- ・《自然体験》；《集団体験》；《勤労体験》の三つの体験と《世代間交流》の内容を入れ計画をたてた。また、社協主催の利点を生かし《高齢者・障害者》の方との交流を試みた。「自然体験」や「集団体験」では「子ども同士が互いに支え合い・学び合い・友達と協力し合っで活動することの楽しさ」を感じ、体験する中で「思いやり」と「優しさ」、「素直さ」を子どもたちが培ってほしいと思った。
- ・お寺への宿泊体験では、行儀や礼儀作法を学ばせた。今回はこれを目玉に募集を行った。指導スタッフは地域のボランティアであることから連絡を密にし、翌月の計画を立てた。ルール等は少なくし、自分で考えさせる機会を多くした。例えば、山の散策では、持ち物におやつ〇〇円分と言わず、ただおやつとし、細かいことは自分で考えさせるように試みた。
- ・家庭の協力を強めるため、父親が参加し指導する「親父のボランティアグループ」の育成も目的とした。
- ・同様の事業が各団体で企画中であったため、実施に当たっては関係機関と十分協議した。

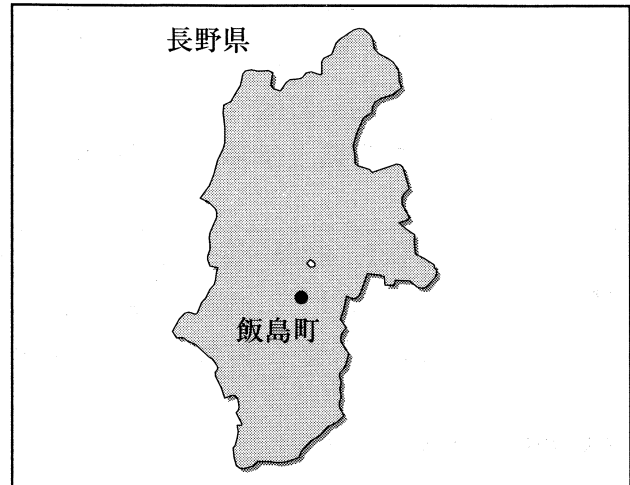
関係した学校・団体の名称

飯島小学校、七久保小学校、飯島町青少年育成協議会、飯島町社会福祉協議会、飯島町教育委員会

地域の現況・特色

活動対象地域の飯島町の人口は10,902人である。本飯島町は、長野県の南部、アルプス山脈を一望できる伊那谷の中央に位置している。

飯島町の宝は豊かな自然であり、この自然に親しみ、理解し、そして自然を生かしてきた先人たちの知恵、そこから生まれた文化や歴史を、次の世代を担う子どもたちにしっかりと伝えていこうという気概で、地域の中で様々な活動が展開されている。本年度からは「地域教育活動推進協議会」が発足し、地域の様々な関係団体が一堂に会し、地域教育力を高めるため連携した活動が進められようとしている。



企画から活動までの経緯

- | | |
|---------------|---|
| 平成 14 年 2 月中旬 | ボランティアに企画を提示し協力を依頼。 |
| 2 月下旬 | 目的、内容の大筋を決めるための打合せ。 協力してくれるスタッフの確保。 |
| 3 月 4 日 | 「学校完全週 5 日制に対応する事業の実施について」案を提出。 |
| 3 月 27 日 | 代表スタッフと内容細部及び各計画事項について検討会を実施。 |
| 4 月 15 日 | 教育委員会生涯学習課の担当者と打ち合わせ。教育委員会との連携について協議。 |
| 4 月 17 日 | 教育委員会学校教育課長を通じて「3 校校長会」に「福祉体験教室」・「わんぱくスクール」のチラシ配布を依頼。 |
| 4 月 19 日 | 町内小中学校 3 校と全世帯 3,000 戸へ案内チラシを配布。 |
| 4 月 23・24 日 | 町青少年育成協議会長と地区育成会長にも協力依頼。 |
| 5 月 13 日 | 開講前のスタッフ打合せ。 (参加申込み数・・・子ども 27 名、保護者 12 名、スタッフ 7 名) |
| 5 月 18 日 | 第 1 回目 参加者 23 名 保護者 10 名 スタッフ 3 名 内容・・・開校式、全員で楽しめるゲームと運動、今後の教室の内容を参加した子どもたちに計画させる。→出た意見等をまとめる。 |
| 6 月 6 日 | スタッフ全体会 2 回目以降の教室の持ち方と注意点について協議 |
- ※毎回教室を行う前には、スタッフの長と事前に数回の打合せを行った。
※宿泊体験については、宿泊先のお寺と数回打合せを行った。

事例の展開内容

- ・完全学校週5日制がスタートしたが、各団体等での取り組みが示されなかったことから社会福祉協議会独自で企画した。
- ・「探検コース」と言うことで内容を企画したが、参加者の年齢が低く今回は体験に切り替えた。
- ・スタッフが自主的に動き、子どもたちとの接点を自らが作り出してくれた。
- ・回を重ねるうちに、落ち着いたのなかった子どもたちが変わってきた。
- ・お寺での宿泊体験は非日常的な体験機会のモデルとして他町村の方からも好評だった。家庭からは機会があったらぜひ参加させたいとの声があった。

企画・活動する上でのポイント、留意点など

- ・参加者は、小学校2・3年が一番多く高学年は数人のために探検は実施できなかった。
- ・高学年がリーダーシップを取り、低学年を引っ張っていく姿が多く見られた。
- ・自分中心の小学生が教室を重ねるうちに【話を聞く・仲間との連帯をもつ・指導者から学ぶ姿勢】ができてきた。
- ・どんな探検をしたいか、子どもと一緒に考え計画を立てるようにしたが、実際は大筋をスタッフが決めてしまった。できれば子どもたちの意見を取り入れ、子どもたちに計画を立てさせるようにしたい。
- ・お寺での宿泊体験をさせたが、初めて仲間同士で泊まれることがうれしかったからか、公衆の場のマナーを守らせることなどが次回への課題となった。
- ・元気いっぱいな子どもたちをまとめることは大変であった。
- ・社会福祉協議会主催であったので、障害者や高齢者・一般のボランティアが参加する「餅つき大会」にも参加させ、いろいろな人とのふれあいができてよかったと思う。

評 価

- ・同時期に似たような内容の講座が各地区・機関等で企画されたために、子どもたちの参加に不都合が生じた。各機関との連絡・調整を図り重複しないように事業を企画する必要性を感じた。
(例：公民館での子ども向け講座、育成会での体験事業等)
- ・すべてが手探りの中で始めたスクールであるので、スタッフは手伝いという立場になってしまい、スタッフに負担がかかりすぎた。来年度の中心スタッフは得意分野の教室を担当し、責任を持ってもらうようにし、他のスタッフは、サブスタッフとして協力していくことで負担が軽減されるのではないかと考えた。
- ・参加した親子にアンケートをとったが、保護者から、「もっと高齢者との交流体験の場を増やしてほしい。」「ゴミ問題、環境問題についてやってほしい」という意見が出た。次年度への参考にしたい。
- ・来年度への課題として多くの体験をさせるために、多機関と連携を取り、また、公民館等と共催できる事業について検討するとともに、地域の中で埋もれている人材の発掘をし、幅広い分野から指導者を募り、いろいろな体験や探検を取り入れていきたいと考えている。